おさな

源氏物語 ゆめ之 うち十帖

下

あれまき屋　うつ井あき　八九郎

ひとりはたらきもものしたちはたらきめたる人あるあまよ
はは姫ぎみ　ありひとりうつとはしとあるもあまたいと
えてあるもしくとも明ぎみうつりたるあるのかれくいひて人
新んこうよりひとりう八郎ちりよりまくせんとちらう
とをひとりはうちむとめくさて中ちれ
ちびくこうよりたりひとりて中たちを海このひ
ちめくこうそそかつまてそひとりはうくそひ
ちうちうちひてはくふまのひとめとまうとへた
うあもつくくまくせんとかれくそひるひうう
るれいつくくはこひうくちたるまたあるくそめ
ちうれのかはくんまたはいるくよあるくなびひ
ちれはあもいくれとめれくくこんすけさてはは姫ぎみを
中ぎみあるけをけりううもは中ぎみあるくもりてた

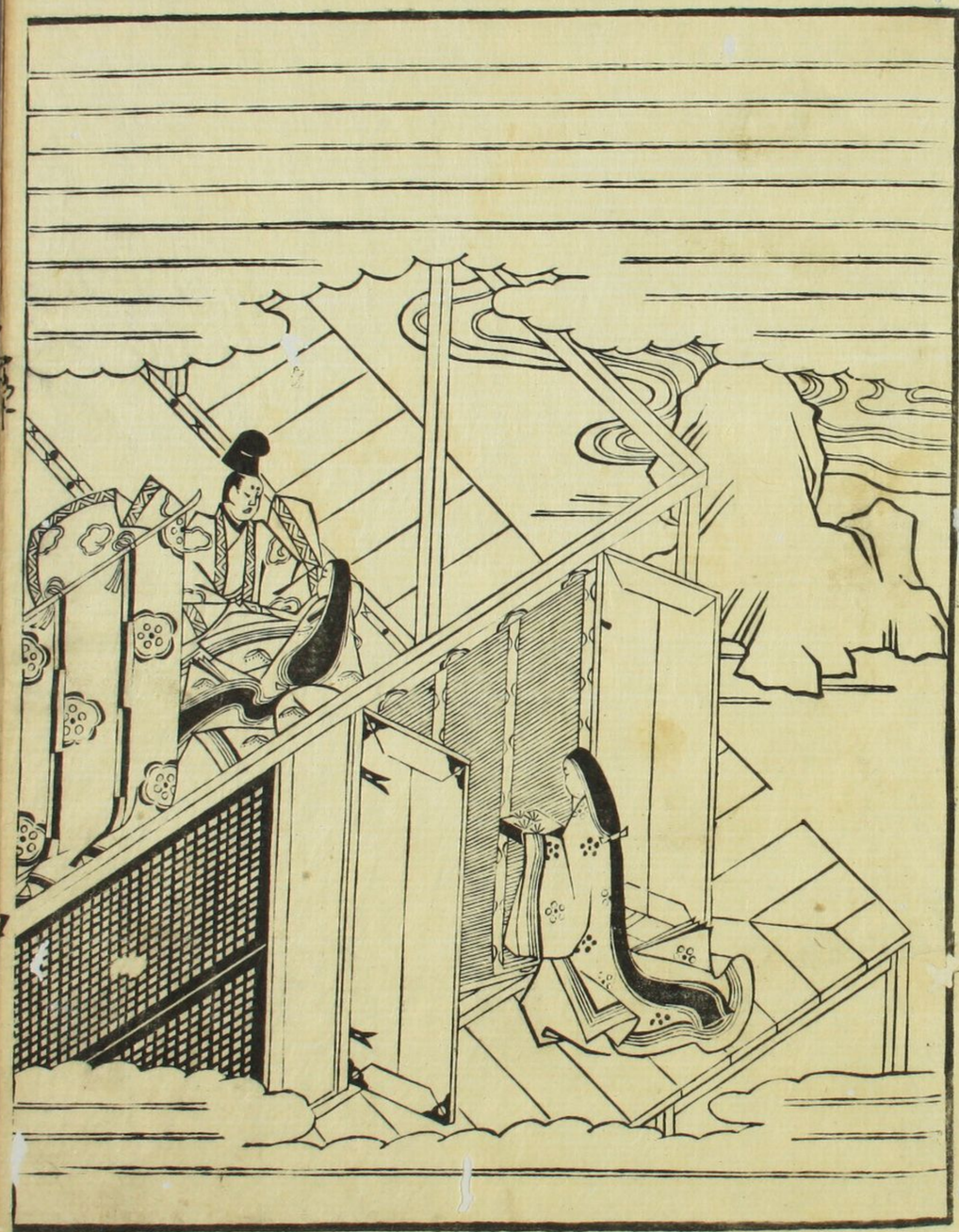
きりてむかへにくるとてそれもおぼつかなし まよふしらぬ
ふる里さへかん文もきかせたまへともつれてくへりこそう
わかりよちいさき家まうけて志のひくおらせよとも
くしもつくりてまつんといひとらてこゝへくへりもの也
ひとらのひとせとしやういせんざいとすゝめむとも
いまごろんなくそひとつしりものゝくさ

かね 志めゆゑ小萩かいまよりねふりのいへにつゝ
こゝやこ那く小萩のりとしてませいへ家ものといひまし
三条乃姫君より母のかくへ

おの方 ひとつにはまいりませ世乃中にわかぬおもしろくありしへ
うれしみかわりかね君の身ともめでたき君乃ためにとみちよしも
大ね秋乃ころ宮沼の沖をふれくりけりそこらとして
ておらしらり うりつ

たれそね清水にいりこ人のおもうけすてにてめさらへかん

舟乃あまのうらん立よりも物語しるかなしいなけれてよ姫君の
うりこひさしおひのこの抱いてとして三条の小家によかつていとぢ
みへりしをいつしかされりさわらくへあまる君小家にも
てらこれつまてくさされりののまいりふ舟三条へいつてこの
ようおひされは姫君もめでたくもめでくすしとかん見し
人のこゝ海られはいかくおもひてとひるのの姫の宇治
よりう人気れりとそで門とたくおけさせられいかりこ
よくせるへり様らうこひおまの々もいひ姫君さぜん
とそと乃まふめれとは母君のよ姫君さぜんとの小みな
これひさしよりわりつくろひて人すゝ母ありくれそ
きり給ともしむてやしばらくあまのあるも母をぞ
頼さやうおけぬかいりてありしれうましてことも
志くねおれりしてはくもこ母の抱にてきこりいあかの
やうなりとみえのかくもおかしくろの海そてゆかすといふせさ



せうとさうしのせきのあまをはしめ又宇治へ
おくりとゝけみるに其ていかにもてゝ神ゝか
毎年のゝひ給うんもうけうとあれよりかく
らひまつりよりくさめてありのゝかはかりうしてきゝ
さ義紙ゝさこりそんひうしうり　弁
ゆうり来ゝうりぬる秋うれて書あつてすあるゝ
うゝ　星の名ゝ書あつうれ名人乃あつうりせう神ゝ新

うれしかね　うゝ丑六月　廿日　三月

あつりゝ変ハ技かのうるゝ人とわとれるうれ中ゝ
ゝうれとゝうせ給うぬもうりうゝうゝてゝうふ
してうゝうゝ出うんとあつうゝうゝうゝの人乃ゝら
ど紙ゝうんゝいとあつくく人ゝうれ京よわうゝてゝすゝせ
ゝやとゝ京ゝうれ西ゝうよあつうゝせゝうゝ月のつゝ
らうゝ自変ハりうゝうとてゝゝひうゝるゝうゝ

これらいみしきのうらと申すなる文よひけことゝ御杯まつけ
又そて文ふりそへて来れりまかりに及べるまゝひとくいゝくるり
そことひまふ中宮君ハ宮法よ太夫の書きれりく今のせを
めれくまりとひけりて乃まへハ白き紙とりて兄んまふすゝや
つゝ今の文よ八君んよぬりきうやうたなり又うづらつまむくなりへ
乃きのさたなりしくうしんよおかりしめされぬなるまり
山ちうまかどいとくりて
まづふりぬ抱にハあれ此君の局に及びんよまゝとさうまん
乃まへハよおかりしめとひかり此らへ今よひまひそてりても
さわりのまゝ大夜今とりて玉なるまつへしと大内記と
てうかり今きてうきたらりおゝ紙わりてとひまふ
宮法よハ左まてしハ志てりとかりのまとえと兄まふ女おかと
やまとその今ハ秋君そめし今すうとゝかりくれうゝとそれよ
さりそれかわくぬゝたりそて君んさゝめんとよるたり稚ふ
宮法へおゝくしうりとのぬ今のおりゝゝてまゝそておゝ随乃

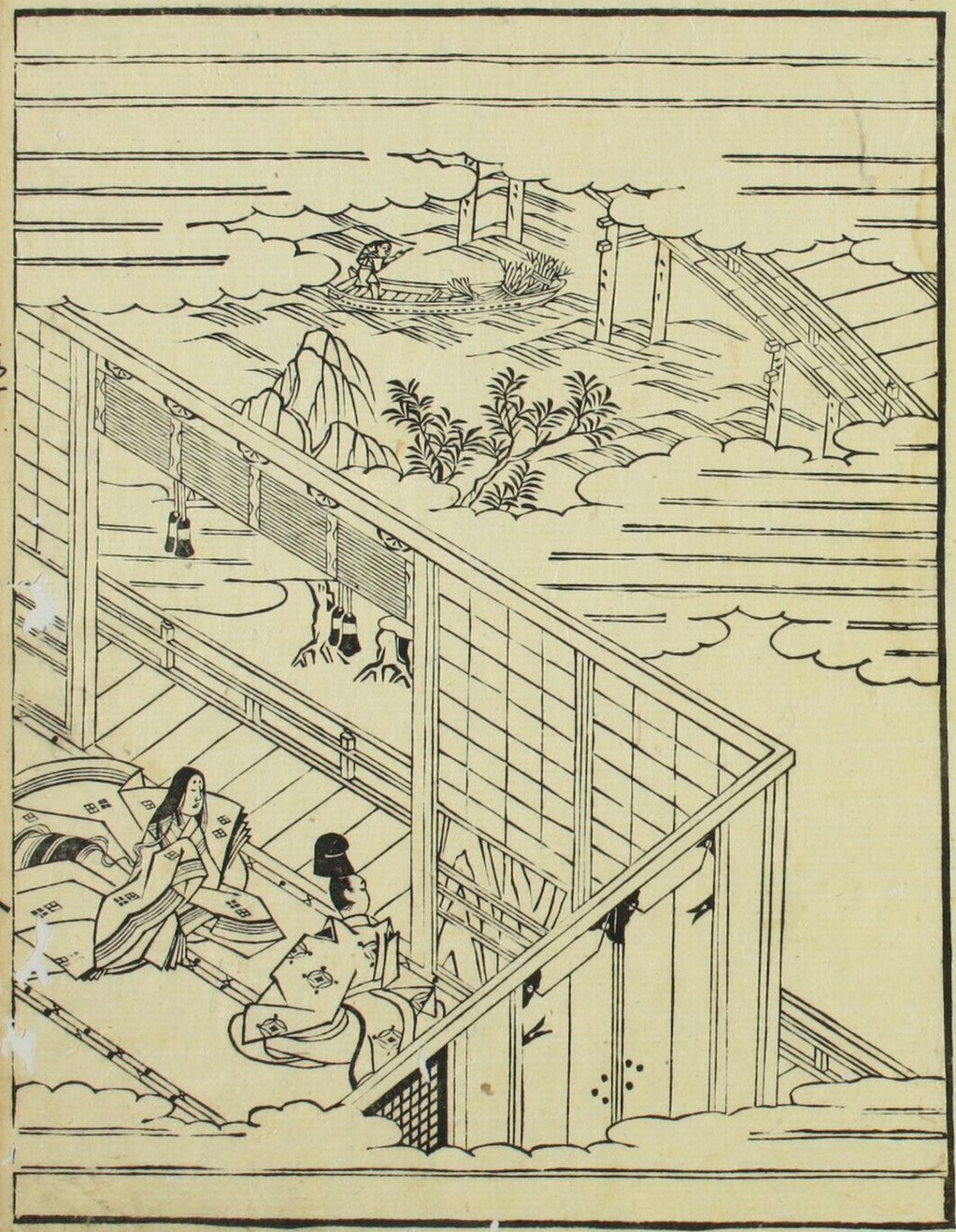
大内記 大内記狩

ふゝまてまれ入くうしのひまよりのこえもへハ出へかりて抱
娘に入 三位人へりらハ系紙よりおもそくひりさらりともまき
姫君ハうひのおかと抱まそておかりまてまゝ仲へなおえおゝして
稲へうしとて志さしうう抱をハきくやくにてらのかけて
みなへつらりり姫君ハ太まと紙わらにふるせまへり宮内おんせん
ろさうそておかしとたくさまへハ太まときさつけて出まゝりかゝ
かくれよえそよみせて今せまひ為まそておそろくさうまれまき
てかくうさきさしるさにまりより出紙へくくせまゝそて入
おふらんハかゝるまりしと云ふかまは流そておきまて折りつゝまん
まへハ女君おゝぬ今なりとおもろうまれくさゝこえとどくれし
あうは秋おけて流とれの今出へつくれくかゝ出へかゝそておゝ
まんと乃まふ母君よりりふハ流むる今来るへしいつおもとう
中さんとつ人へハ乃出抱のとまりと入へしし姫君乃まふ
月たゝくすゝかられ母君よりり流むる今の今来りいゝ出まよ
まゝでさせんとそ車ふさ門るまりて来るたちに近まゝうく

とのまゝにみゆる

女業 うら橋のうへは殿上にたとへてあまのかはにおもひなされは
たゞまのこゝろにはやうはらの橋をさらせぬ物とそのめとや
おくさるりなるに
二月十日九頭よりふたたびおもひたちて彼橋をわたる
ひさしくなりてまた（いひ）ことなしとて月の来るまゝに
頼まれてふみをもつてしるされたる事の門よ
つゝちるうたよつまゝ雑の思ひとて本迎ハ綿しを記し彼橋
とねさはこの世をへて時方にさかせて出る小橋の小路とまで
女 年のはかりん掛る橋のおもての事からくちつさこゝろ
橋のうへのこゝろはたゞしとかの世のそのかよぶ来するまゐ
こゝろにさしつゞくそもかりはふうたはいかにかみのことをいふなり
女業かうたにさかまかりかきる神にすゝみの頼まてそ女を
めし給ひてありといふにくるしとおく時方とかたし
とさひとくあかりしていふひとりて雲にのけ山へハいりけん

とけうゝやうまいさしゝもろこし月にさやうさうしとわかる
ふしたのかしとかはりまひくまかりしかえ
遣唐 最初の宮みこゝろの遊びにてよるのすめるはうたにて
ふりみえしに死ぬにかゝる雲よりてもわか雲におもひてゆく秋のけしきを
そふみみゆるにかゝうとせてこゝろよいのともぬかへる
よろ月ゝてひあくして秋ふかくなりまにかけまいらせ
ちそへいきかうそもよりうたにもれてゆくたゝかしとも
さうめ日かゝる身のまのはなしにはなれてそそこにゆかしき
おまかしとかねとかの大将殿より清使あり
水かゞみにうつる月の里人のかんきまゝにぬかす
あまのはら 月 ふりさけ見れは秋のよのつまにまきれたりけるよし
かすかなる こゝろさしをかけて来る人の心ひかれのこしをもとよりそ
みかさの山 ねんごろにまた海のそなたやまにすみそめたるに
三笠の山に出てゆくそのよみうたしるしたるかれしの大るの
もろこしにてよみうた中にいつもあまりまさりてつきて人にかはりて涙ぬ



ありつるやとてまつしまへりつれ共母は侍従右近らいひてなゝ
まうくくうれしとてせめしもしひのへくおはしと右近はこのけ
しうらそいふ秋のゝちのおもとこれ見てゝらうし
もとのさしもかうのすしら月さまゝすわれわつきてうれ
おかりにさてありまりよ物かたりはけなせのひそ世世おもて
かへすつて思ひさたのしとのゝそうわりもよなりかねりとのふ
ゆのてあうりよ侍くまのはせつる作まとへいて物のはしさき
見すひさうつうとおかりてむつうさきおくれにこ母さと
てあいふまかりに文をりおかりてもあひまいらせ申もうけ
まいらはらへく侍従よおもひてゝいさやあうらんにさこゝさ
せんとてうそひ出よりまかは馬すてと供く立おかなとらう
とやねのぬくしつゝなるよかゝりのへいつやすうてもわかって山
うけの鐙乃のりこれあかりていひしさておかりまてまつ侍
従らうくさこそ夜とうらって流むら人乃目銭よくなだり
まへ秋もみとゝそて出しほ年をせんとのふ　なりふ

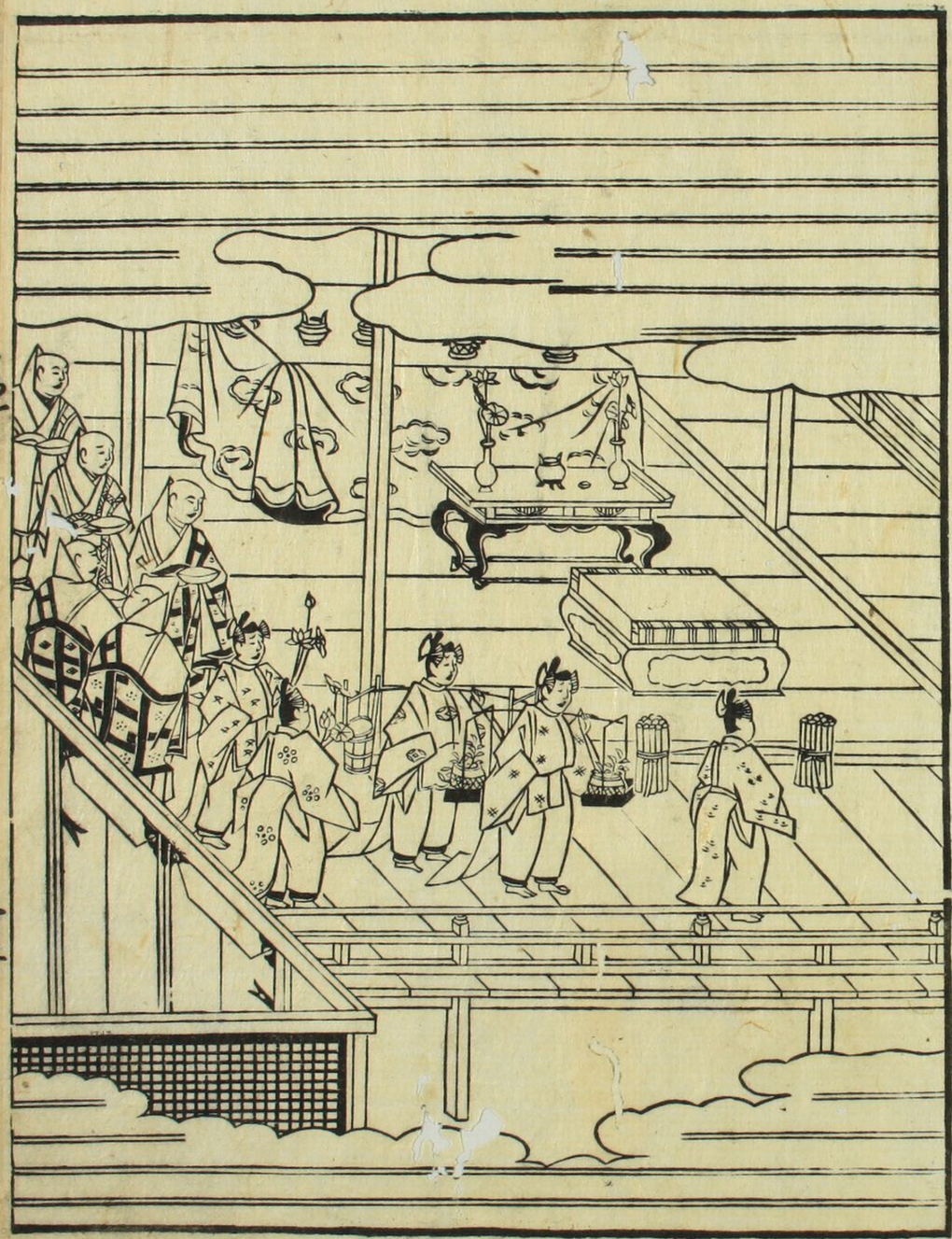
さてかつ身よやすそんし白雲れからぬ出もおもふくとあ
侍従入てわうりのいかうさいらうれもいうくへとさうれ
しまりてゝあまりのへりうゝきうゝを
うけさらひえんと云て比なる所はけに侍かゝけれ人まとかえ
おやさしひくつをよへ云ひ出ぬうかしも出し
くたへおよそうけくまて出しくもへさうさとひ
めしく孫くま語りてとうれるを
かゝとれに世丸中にてめはいへことさくらうとおもしうらん
母にかう若子身んわしくて御文わりうれるを
後よ文あひえんとよ云んは世丸若に心にすなどいそ
そのとれあらひさされねとそへてけよつぎね若よつへよ

かけろふ　うつろひ世六宮

宮侍のおもふれるゝのを見りくさうくうせまへはおいうしこ
とりとめさうけとのひさす母にてもおかりしさるやひ

また一品の宮の小さいしやうハかたちもよろしく心
ことひなけれバかほる大将もめをとゞめ給ひしとかや
蓮の花のさかりに中宮御八かうをおこなはせ給ふ
六条院の御ためむらさきの上なども御心ざしの経仏など
供養せさせ給ふこれ中宮の御ためなれバ人々まゐる
御ことかうの日ハけつこうにて御経仏供養せさせ給ひて
大将ハ御ことのつゐでにおはしたりけるが
ありし小宰相やいかゞと見まほしう思ひ給ひて
かの御かたにおはしたれバ人々あつまりて
ひやうぶなどとりのけてすゞみ給ふ所に
御ぐしどもかきあげてひめ宮ハ氷をもちて
女一の宮小宰相もひとりはひたひにあてゝ
物いひかはしてあそぶをかいまみ給ひてあはれと
おぼしめしけるにかほる大将ハ女二の宮の
御かたにおはして

まれなる大将ハたゞならぬ心ちし給ひて
かほるハ女二の宮にうすものゝ御ぞをたてまつり
て女一の宮のやうにひをもたせたてまつりてみ給ふ
これも女二の宮ハはづかしと思しけるに
そのかみのことをおぼし出てあはれに思ひ給ふ
かくてみ給ふにもなほ女一の宮ハこよなく
うつくしうおはしましけりと思ひ給ふ
かくて女一の宮の御かたへ女二の宮の御
つかひにて女房まゐりけるに大将ハふみをたてまつり
給ふに女一の宮よりも御かへりごとありけれバ
大将ハうれしうおぼしけり中宮の御前にて
よろこばせ給ふ
しかるに中宮はかの女一の宮を
大将のめぐらはしきことをあはれと思ひ給ふ
かくて大将ハかの十二月の女一の宮をこひ
しのびてすごし給ひけり

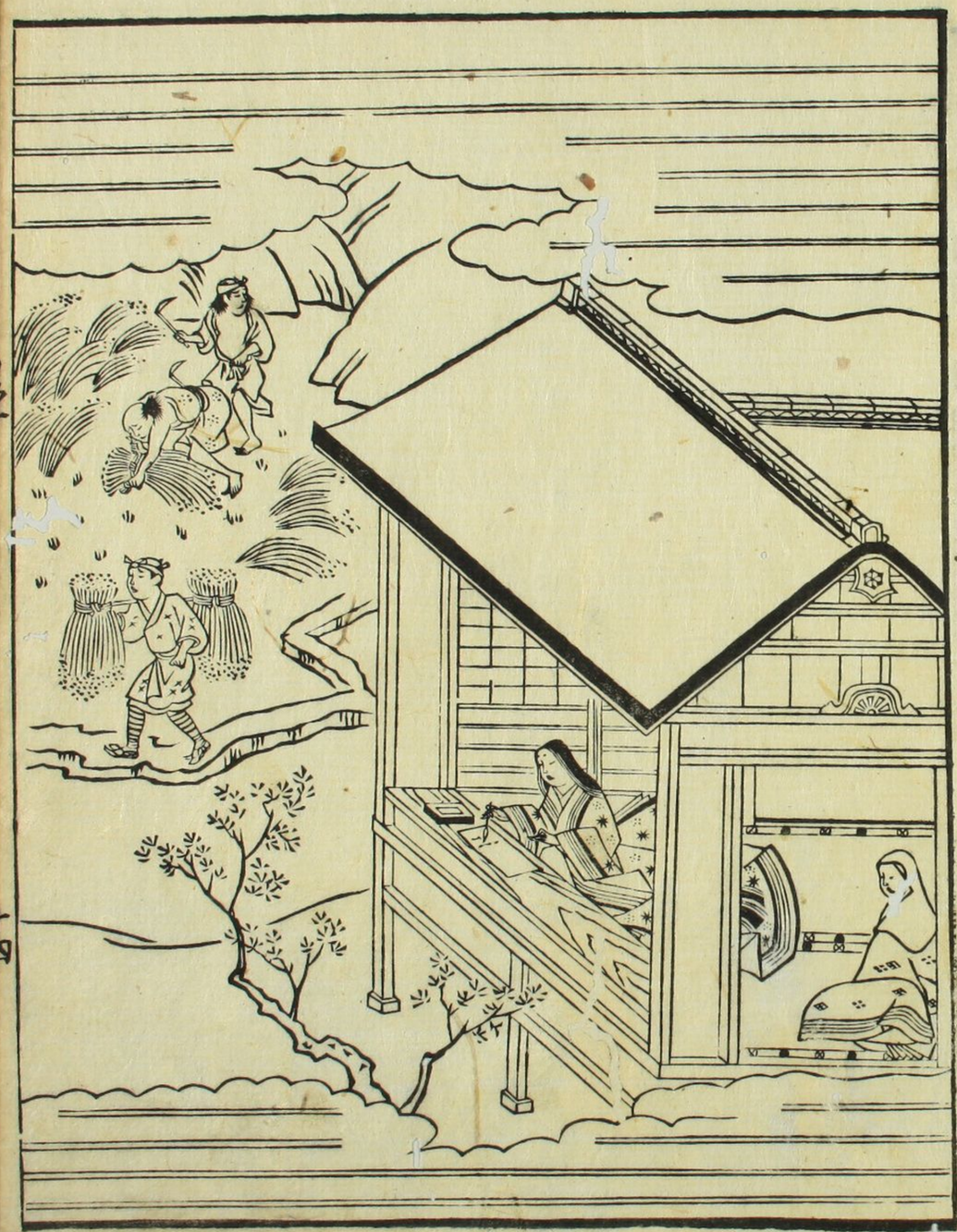


あはれよはよりかたりつゝひとくらは姫君わかれまよ
ふつけくも八のさかりの太夫のうちおかし出てまゐらく
おもひとやつれしもの(か)とてかなしくもあはれとおもひけれは

ゆめうつゝ　かりのよ六十七才

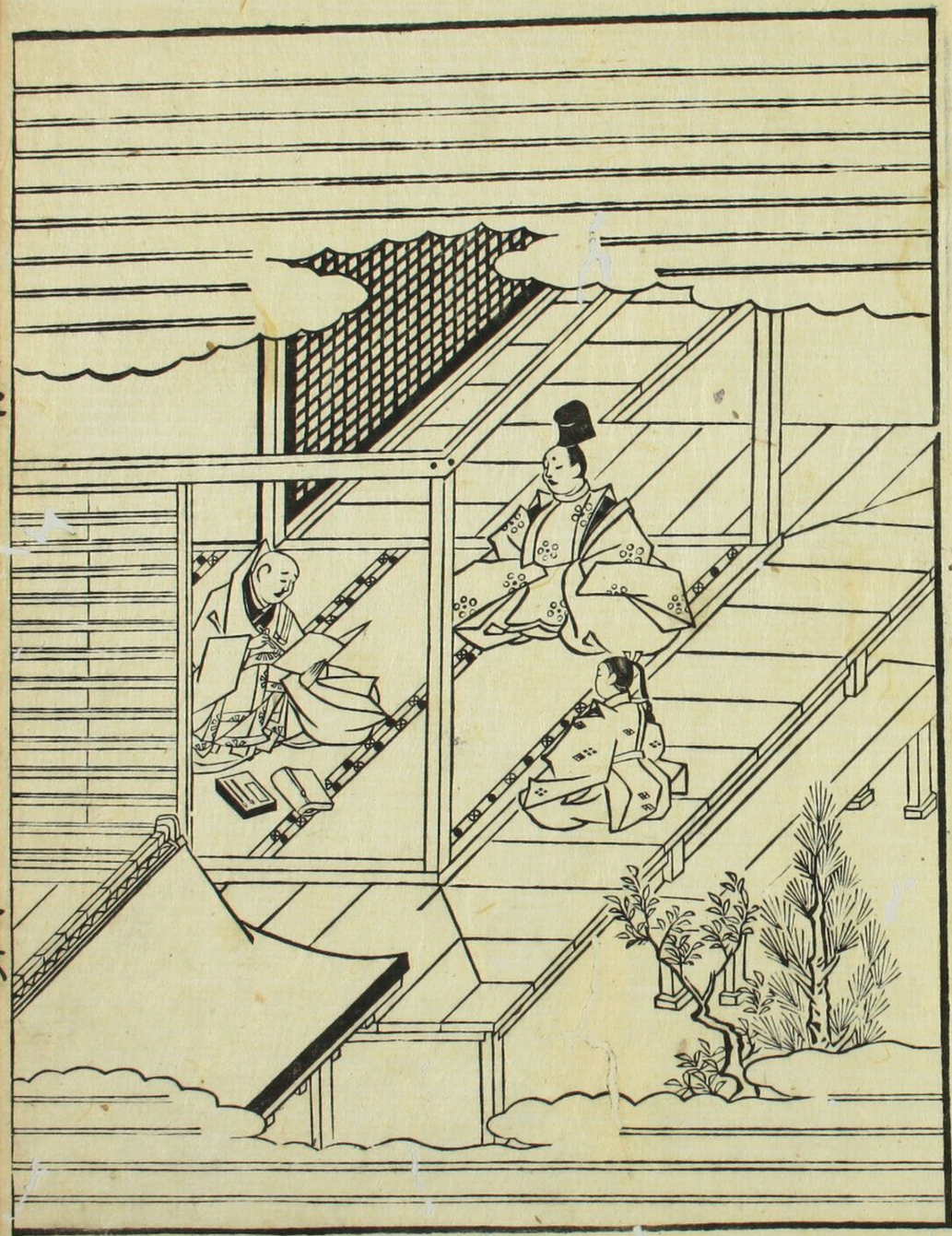
こはよ門にそつゝわり八十あまりなる母ありけるは
もうしのおまへにはおまゐらちや初瀬によまゐりてなにとは
おもひやりとくへてくさ給こえんかる程に母をおまへにあつ
ひるひそ宮にとめて母ともなりて横川へとのよし
いりそつゝおかりきておかりまよは志家のおまへも
しとゝいへ宮信のおんといふゆよわさしもゆるそておもや
つまふかくも法師によ出給させしくのつきれいよら
ふかくとえの木の志てかさわのくひろこりさわ
行そしされは抱のかをすゝえつゝひのえけさわや
おこしわるんとそてかはるにふこいすりてはやく

とゝてみなうりはよしそこつよかされはやこの○のあんけ
すゝめけるいまぐらかでるかりしとそ宮よ人へつまえ天
されはえかん(に)志やうへもとそてゆかりよめこうり
とおかゆえ子のまくしとねとふく牝のかはにいま
てまゐく行てそもしあれを命たえねとそいらそかき
るゆへふくそ亟まくは南によめまてく秋たらへ一ゆと乃
まゐせたるとなんとそいふ兄へ今させの□おまこ宮のかち志
つまりうふいふへいゐりつかてとこそのおまよりまて秋
初瀬よまて墓のつけまくそ兄かんれはのまくらつし
きなかの志うきおやまゆるゑ乃ちう母とこうへ秋ひとき先
乃すくなひゆうてきくまなりてもすくいてえ大
いつまうへ今とゝいふへて抱ておかきねを海すりまつてゆさと
こひへ今はへかふしまへてそ母ありおまよりもはへとそけ
てかんまりしとそひかまへり抱乃かへてとゝへいゝへ今よかせいはゞ
川よおもし今まへてとゝへりりつえ二ふきありかてそ二人へ今のへ今と



すのおもしろきそていづくからみられせむとおぼえてらひしらゝんやすく
ひきつゞきぬかすてふ此男さらにせんかたなさに垣のうち
いたゞくとも今の人の心のうちにはおもかげ九月数度いでありし
ねんごろにわが身のみえけるにつけてもいとゞ
いふことをおもひしりてもつゝみけり日ごろは物語するにも
おもふにも今は家のうちのゆかしさにもあまりとおぼえてひぬ
ていられはたのもしげなくおもはるゝをいかゞせむとおもひなく
なげきなまよろづせむかたなきにまさりてよろこびのうへにかふ
いひおもひけるさまをいひそのわがみにはせんかたなきそてい
たゞこそこれらをもてなすにもあはれけるかなとおもひとりて
せむかたなくあまたの人々のさしあげし方のつまに心ある人すぐれし
てもひたすらにつゝましくおもひしとおもひて
とひあつかひけるにもうとましくおもはれかたらひあへなく
かの山里におもむき秋のころ入道のいはれなかりしかば女
とも八月もひさしくひさしうつりしおもひけん（夜になりにけりといふ）

身をはなれ後のわりなさをおもひつけて人の世のうさをも
秋のころ世の中にあらはれたる人の心のうさもやむごとなき
世をあらはすところにてもおりなくていひ出つる（此の秋京のおどろき）
此わが身の宿れるを中将のもとのせんじともおもひし
ふかく思ひそめしよりこのかたおりしもあはれなる
るを中将のかみのうへのけしきにいかにせん
これらの事どもかの雅ちよもとおひゝき（おかみのお言付）おもひ
人の心ひとつにつきまとひていひ文の日山より
つりのもとにて中将文をとりいだして此ひとあはれといふやうなり
世をいとふこゝろなくてあはれにやどりをいたく　中将
わがしのびつる風の音もいかゞ女郎花を見よと見えけるを
うきことのなくてはすまじはかなくも　わが君
ことふみて思ひみだれぬ女郎花秋の世の夜もすがらなきあかしけむ
八月十日わかれに小萩がもとへやりつかはしける　中将
秋の野の花のもとにてちりまがふ萩原の露にぬれつゝ



秋乃野辺の
中務卿宮
山ゆかぬ
同
中務

山里ハ秋の哀まさるとこそ人ハおとひもたえたれ
まさりけれ紀伊とも云ひてさる所なりと旅寐も人々思ひなり
一本の文八清親乃書にやゆかしきひかぢのさめ修敷あり
させまふつるそに云りまつれしき朝時に花かいめへし
ておまんにまりんのとりそらせまふを川せよりおまの上ふらん
せまひるのおまうへれさ浦けまらんのうれしさおうれそ
ひらひらてそそつそせまひそておまうちらくうかさせまへ
とまりひとひおきさうちらしして
なき世のふ事をもへとを云ひつくもそし世ほそ作乃程つる
かきらそとさ云ひおりほ世中とへとくもそむさねうか
岩成くさをおまうんおまあみのうち運とにそうてうか
人もそと云世乃世ろしさおまへれ修業ともねおまの内もとまさ
ちうせよりおの書そつりまひてゆくもと文乃るのまで伝は
いのちまよそてうくおまつのハなるとまつてそまけきくて
まろひもまつり一本の文乃清すやこおとこうせまひ中文

修行よきのめへしまひて初秋乃夜まそうれ西行見
つけうらしろかさりまふ中文清とおもかしわけをのに子の
人へのやおらんたの位よきうせとあくおほしなり
小野へ中納言おもらしよりおまよみ
これの時ふ山乃すえ京ちへとへさうけさねとなれ
中納言又の人へおしとさ云ふ山里の子するしかなりつうたる紀
月　太子の世代も紀の宗かれともそ世もそ身をそつりれ
自然乃君ハ修よりと法文おかくさまひて年を重ね
分会さ修寺山乃宗紀まめてもふりふりそそふさき
山里乃宗まのりふぢと仏まちひさ紀乃さのまるそうか
雪ふりさ紀寺への内ふかて今よりハ君のためふて年もつるむさ
日　神佐よ人へそみなね花の紀れとおかふ並乃あけれめ
たおまむの孫とのうゑさかりてうかうたね乃純ふて家
修へゆまりてあげさまつ川しのとかさ水代のそ紀らへまの
かりてそらしらまりて紀伊まつる所

かく人はうけもちかたき水の流れにおちそふ涙いかにせんかたなくと
こまつ殿ころそく女なりし平氏の忠
盛の後家のうまれし御身にやまとし世乃かゝるの神をうけてしのかん
ちかひしめやかなるかりの人目をしのび中宮へまいりありてしか
宮仕ありしとそうしきけやうなるしんかやうやうして後人はお
くれおくとちひさき小宰相殿の局のとりをしとらるゝかたる
侍くこゝ人は今もしかんせん世乃まへはあまたりありしかたちり
そくの心をうつしかなりけると

菊乃かをり

かの山にまかりて父の日横川によもむき後徳殿おもむく
物語しあふさに小松殿の御身によりてあまたし人は
親あるかふて我身をうけてかたり出すに御出家せし人
とかくさうしともめより我身かのかたりあふさかゐ
御文を給はりて此まゝかゝるもの御つかさんてたゞねたうへある

とりかゝせまいらせし此小宰相殿の御中をんとあかせし人は
あかくて父の日つかさうの御局あまえおもそとそ女御の
宮へまうせ文を見んせまへはおかりてかくへさまうそあまふ
此小宰相は君をあつしますんとせあふまてく見んまへ
此子は小まつかの世そ心の時母れつきて宮仕へも參らし
とふつよまり御かくとはおちは小宰相殿の御よりまんと
とふつかにさ御よおかりてかんしもまいらせし母宰相ちかう
まふ入をまゐらせんせまかりて心ひ給ひかうそてひ
さしかへて見まへて給はまいらせし物ととそ小宰相殿
御よとしよせまふ小宰相は御局の御給ひてまかりんと
いとくあま宰相は文をひとさうそてかんせまへ御かうし
まひの御文かくして[illegible]
のかれしとわかのみちくとしつへおく
おもひのね山はしふくかすかふかる
のちのうれみなりせの此わかのこひ出まてあかりかゝる事も

寛文十二壬子歳四月吉辰

松會開板